

2月12日（日）、東京世田谷区の三茶しゃれなあどホールに観に行きました。

中村敦夫さんは、二つ塚処分場が造られた始めの頃に日の出にも来てくださって以来、私達にとってゴミ問題の頼りになる活動家！ 10代の頃、テレビで観た「木枯し紋次郎」が、この朗読劇に重なって見えた。上州新田郡三日月村の貧しい農家に生まれた 紋次郎は間引き*されそうになるところをかろうじて免れたという生き立ち。少女時代の私にとって衝撃のストーリーだった。

「線量計が鳴る」の登場人物は、元原発労働者のおじさん。福島弁で語るリュックを背負った彼は、たんたんと福島第一で起きた事実を語ってくれる。反原発の集まりや、FBで見聞きした情報で、そうねそうね、と聞いていたのだが、やがて私の知らない事がデータ化された資料と共に語られる。

朗読劇とは言え、さすがに役者、いつの間にか私はそのおじさんの横に一緒に歩く旅人になっていた。学者や、専門家のお話とは違って、一対一での対話として受け取ってしまう情報や怒りの感情は鑑賞者を釘付けにする。

どうしてこんなことになったのか、これから出来る事はあるのか？帰りの車の中で、大沢さんと、渡部さんとで話をした。想像もつかない途方もない年月をかけてしか原発は地上から無くならないことを思うと、若い人に大きな負担を強いてしまった。

中村敦夫さんは、このパフォーマンスをすることが、残された自分の人生の課題であるとおっしゃった。人の心を動かす表現者、役者ならではの彼の戦う方法。多くの人に届くことを願うばかりだ。



中村敦夫さん公式HPより転載

*間引き=口減らしのために、親が生まれたばかりの子を殺すこと。